

TOPICS

人工巣台を利用するミサゴの調査

- ミサゴは、猛禽類の1種で、タカ類の中でも大型の鳥です。魚を主食とすることから、北海道から沖縄にかけての海岸、川や湖の近くに生息しています。
- 昭和中期頃まではよく見られる鳥でしたが、昭和40年頃の高度経済成長期に激減し、環境省のレッドリストでは「準絶滅危惧種」、高知県のレッドデータブックでは「絶滅危惧ⅠB種」と、危機的状況が続いているといわれています。ミサゴが巣作りをするマツの木の枯死が全国的に蔓延し、生態数減少の大きな要因の1つといわれていました。
- 平成8年にダム周辺のマツに作られた巣で、成鳥2羽と雛2羽が目撃され、その後2年間、同じ木でミサゴの繁殖が確認されました。しかし、次第にマツが枯れ始め、平成10年の台風で枝が折れて、巣が落下してしまいました。
- 翌年の繁殖期にも、巣が落下したマツの周辺に成鳥が居ついていることが確認され、中筋川ダムでは繁殖環境の保護活動として、人工巣台の設置を行うことにしました。
- 幾度か台風被害にも見舞われながらも、改良を重ねた結果、平成11年から10年間で10羽の雛の巣立ちが確認されました。それ以来、中筋川ダム周辺では多くのミサゴの姿が見られるようになりました。時折、ダム湖でも魚影を追うミサゴを見かけます。
- 今年（H26）も人工巣台の近くまで調査に行ったところ、7月8日に成鳥2羽と幼鳥2羽、7月14日に成鳥2羽と幼鳥1羽の姿を観測することができました。

